かずさの博物誌

ハジロカイツブリ（羽白鳰）

～異国情緒あるルビー色の目～

文・写真／成田篤彦

一昨年の冬の夕暮れにある河川の中流域の土手を散策していた。毎年、高速道路の橋げたの周辺に冬になると数羽のカイツブリがやってきて、潜水しては魚をとっている。「今年もきているな」と思いながらも「一羽だけ少し違う」と気になった。そのわけは橋の下の薄暗い川面を行ったり来たりしていて明るい場所に出てこない。それに、少し太め。くちばしもほんの少し細長いと思った。

帰りに双眼鏡でのぞくと普段見ていたカイツブリとは頭の形が異なると気付いた。しかし、もう日が落ちる頃でしかも橋の下の暗がりの川面である。はっきり分からないが、とにかく、私が今まで見たことがない水鳥である。たまたまカメラを持参していた。思い切り感度を上げて撮影した。粒子の荒いかなりピンボケ写真であったが、赤い目、細い尖ったくちばしから「ハジロカイツブリ」に違いないと思った。この河川では初めてだ。

翌日は高速道路の橋から2㎞下流にいた。河川の中央で潜っては浮きあがりまた潜る。岸辺から撮ろうとするが、どんどん上流へ向かっていく。結局は昨日と同じ橋の下までさかのぼってしまった。動きが素早く、しかも遠方なので十分に姿を見ることができず残念であった。

ところが、偶然にも木更津港の入り口でスズガモやヒドリガモと一緒に2羽のハジロカイツブリに出会った。船が往来する度に波に大きく揺れながら、ふわふわ浮いていた。近くで見ると小さめの紺色がかった黒い野球帽をかぶったような頭、喉から首にかけての白い羽毛、くちばしが細くツンと尖り反り返っている。白色の喉とほほの境目の黒色の中に透き通る真っ赤な目があった。こんな色の目をもつ鳥に出会ったことがない。また、浮きあがったときの水をはじく仕草もかわいらしい。

房総の冬空の澄んだ青、海の緑色を含んだ青、そこに浮かんでいる透明な真っ赤な目をもつ水鳥。この組み合わせが、何とも異国情緒に富んでいた。しかし、カメラを向けると見る見るうちに岸辺から遠かざり、港へ入り込んでいく。思ったよりはるかに用心深い。

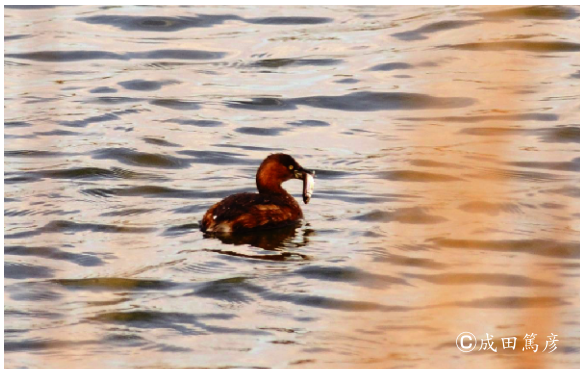
ところで、ハジロカイツブリは冬鳥として全国の湖沼や沿岸に渡来する。アジア、アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカに広く生息し、越冬地では魚類やエビ類が重要なえさになる（日高敏隆監修1996日本動物大百科3鳥類Ⅰ）という。また、千葉県下では外房や内房の海岸から東京湾の湾奥部まで広く見られ、岸近くの浅い水域を好み、潜水して魚類や底生動物を捕えて食べるという（千葉県の自然誌7巻2000）。

上総では同時に2羽以上を見たことがない。箕輪・外2名（2000「木更津市小櫃川河口鳥類目録」桑原・外3名著『東京湾の鳥類』たけしま出版）でもこの鳥は小櫃川でも少数しか見られないという。

上総に一年中いるカイツブリは魚類やエビなどの甲殻類を食べる。同じ餌を好むので、ハジロカイツブリが中流域にも多数訪れるとカイツブリの生活を脅かせるが、現在は少数しか訪れないので、カイツブリも共存できるようだ。

▲ ハジロカイツブリ／カイツブリ目カイツブリ科
冬鳥。全長33cm。
2008年12月19日　木更津港＝成田篤彦撮影

◀ ハジロカイツブリ
上流へどんどんさかのぼっていく。
2008年11月24日　木更津市菅生＝成田篤彦撮影



▲ カイツブリ／カイツブリ目カイツブリ科
全長26cm。上総に周年生息する。方言でミオ、ムグッチョなどという。 2010年2月3日　木更津市十日市場＝成田篤彦撮影

◎写真・文章の無断転載を禁じます。